

平成21年5月29日現在

研究種目：基盤研究 (B)	
研究期間：2006～2008	
課題番号：18320073	
研究課題名 (和文)	日本語諸方言イントネーションのデータベース構築と音調記述に関する研究
研究課題名 (英文)	The Database Construction of the Intonation Systems in Japanese Dialects and the Descriptions of Prosodic Structures
研究代表者	
木部 暢子 (KIBE NOBUKO)	
鹿児島大学・法文学部・教授	
研究者番号：30192016	

研究成果の概要：イントネーションは言語を超えて共通性を持つと言われることがあるが、日本語諸方言を見る限りでは地域差がかなり大きい。本研究ではイントネーションの地域差を明らかにするために、まず、各地イントネーションの調査を行い、方言イントネーションのデータベースを作成した。次に、イントネーションがアクセントと密接に関係していることを考慮し、アクセントとの関連で諸方言のイントネーション・システムを記述することを提案した。無アクセントに関しては、福井市方言をモデルとして文末イントネーションの記述を行った。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2004年度			
2005年度			
2006年度	4,000,000	0	4,000,000
2007年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
2008年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
総計	13,200,000	2,760,000	15,960,000

研究分野：日本語学 日本方言学 音声学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：イントネーションの記述、イントネーションの機能、文末のイントネーション、イントネーション・データベース、アクセント体系、無アクセント、意味内在アクセント

1. 研究開始当初の背景

日本語の音調のうち、アクセントに関しては服部四郎「国語諸方言アクセントの概観」(『方言』創刊号、pp.11-33、1931)以降、研究が急速に進み、現在までに諸方言アクセントの体系、諸方言アクセントの成立過程、変化の動態などがかなり明らかになった。しかし、イントネーションに関しては国立国語研究所『話しことばの文型(1)・(2)』(1960・1963)以来、ほとんど研究が進展していない。特に方言イントネーションに関しては、1989

～1992年の科研費重点領域研究「日本語音声」において、疑問文のイントネーションが10項目ほど取り入れられた程度で、全国方言を体系的に扱った研究は皆無である。

一方、日本語諸方言を見わたすと、アクセントの地域差と同じくらい、イントネーションにも地域差がある。イントネーションが文の意味や意思伝達に直接関係していることを考えると、イントネーションの地域差の解明は円滑なコミュニケーションにとって、不可欠である。

2. 研究の目的

以上のような現状を踏まえ、本研究では以下の3点を目的として研究を行った。

- (1) 方言イントネーションの調査方法を確立し、イントネーション調査のモデルを提示する。
- (2) モデルにより調査・録音を行い、諸方言イントネーションの音声データベースを構築する。
- (3) 音声データベースに基づいて諸方言のイントネーション・システムを明らかにし、イントネーションの地域差と普遍性、動態等について考察する。

3. 研究の方法

(1) イントネーション機能の整理 従来、喜怒哀楽といった感情を表す音調や、質問・断定・叙述といった判断のモダリティーに関わる音調、フォーカスとそれに関連する音調、文の枝別れ構造を表す音調など、さまざまな機能を担う音調がイントネーションと呼ばれてきたが、本研究ではイントネーションの機能を以下のように整理し、これに従って調査研究を進めた。

- ① 句頭表示機能
- ② 句末表示機能
- ③ 句構造（左右枝分かれ構造）表示機能
- ④ 文末部分における伝達意図表示機能

(2) アクセント体系との関連 イントネーションはアクセントと密接に関係している。本研究ではアクセント体系を以下のように整理し、これとの関連でイントネーションを観察する。

- ① 下げ核（東京方言など）
- ② 昇り核（雫石方言など）
- ③ 声調と下げ核（京都方言など）
- ④ 声調（鹿児島方言など）
- ⑤ 無アクセント（福井方言など）

(3) 調査とデータベースの作成 上記(1)(2)を踏まえた調査票を作成し、各地で調査・録音を行い、方言イントネーション・データベースを作成した。

(4) イントネーション・システムの記述 (3)のデータベース等をもとに、アクセントの弁別特徴との関連で諸方言のイントネーション・システムを記述した。文末のイントネーションについては、無アクセントの福井市方言を取り上げ、述部の韻律の記述を徹底させることから始めるボトムアップの方法により、記述モデルを作成した。

4. 研究成果

(1) イントネーション・データベースの作成

データベースの内容は以下の通りである。

① 調査項目(1)：一語文、命令・禁止・義務表現、意志・勧誘・希望、推量・様態・伝聞表現、疑問・反語表現、過去・回想表現、あいさつ表現（計70項目）

調査項目(2)：文構造、WH 疑問文、Focus 文（計33項目）

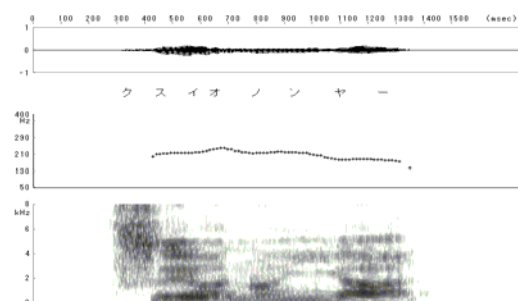
② 調査地点：青森県五所川原市、山形県鶴岡市、富山県富山市、三重県津市、徳島県徳島市、愛媛県大洲市、長崎県対馬郡厳原、鹿児島県日置市、鹿児島県奄美加計呂麻島

③ 記述項目：データベースはエクセルで作成した。質問項目ごとに「音調記述」と「アクセント情報」のセルを設け、前者には音声のカタカナ表記（ピッチ記号付き）を、後者には単語のアクセント情報を記入した。ピッチ変動の記号は以下の通りである。

- [拍間の大幅な上昇
-] 拍間の大幅な下降
- % 拍間の小幅な上昇
- [[拍内での上昇
-]] 拍内での下降

以下にデータベースとピッチ図のサンプルを挙げておく。

番号	項目番号	質問項目	4602 鹿児島県日置市	4602 鹿児島県日置市
			音調記述	アクセント情報
01	024Q	薬を飲むか	クスイ[オ]ノン]ヤー	Bクスイオ Bノン ヤー
02	024A	飲む	[ノン]ドー	Bノン ドー
03	025	飲む	[ノン]トー	Bノン トー
04	026Q	誰が飲むのか	[ダイ]ガ [ノン]トー	Aダイガ Bノン トー



(ピッチ抽出は SUGI Speech Analyzer を使用)

現在、データベースはDVD-Rに保存しているが、将来的にはHPで公開する予定である。

(2)イントネーション・システムの記述

①アクセント体系とイントネーション・システム

上記3(2)のアクセント体系において、句頭・句末のイントネーションがどのように行われるかをまとめると、下表のようになる。

アクセント体系	イントネーション	イントネーションの位置
下げ核	上昇	句頭
昇り核	下降	句末
声調と下げ核	声調	句頭・句末
声調	声調	句頭・句末

以下、具体的に説明する。

②下げ核方言におけるイントネーション

下げ核方言では下降が語のアクセントを表すため、イントネーションは上昇で表される。上昇の位置はアクセント核の前、すなわち句頭部分。これを調節することにより句の大きさを自由に設定することができる。以下の東京方言の例では、(a. 1) (b. 1)が3句の発話、(a. 2) (b. 2)が2句の発話、(a. 3) (b. 3)が1句の発話である。

(a) 庭に植えた桜

(a. 1) ニ[フニ]ウ[エタ]サ[クラ]

(a. 2) ニ[フニウエタ]サ[クラ]

(a. 3) ニ[フニウエタサクラ]

(b) 池に落とした朝顔

(b. 1) イ[ケ]ニオ[ト]シタア[サ]ガオ

(b. 2) イ[ケ]ニオト[ト]シタア[サ]ガオ

(b. 3) イ[ケ]ニオト[ト]シタアサ[サ]ガオ

③昇り核方言におけるイントネーション

昇り核方言では、上昇が語のアクセントを表すため、イントネーションは下降で表される。下降の位置は昇り核の後、すなわち句末部分。以下は岩手県雫石方言の例で、句が終わらない時(接続の時)は文節末尾まで「高」が続く(上野 1989)。

(c) 鯨 (d) 鯨からも

言い切り [ク]ジラ [ク]ジラカラモ

接続 [クジラ… [クジラカラモ…

東京方言と同じように、下降を調節することにより句の大きさを自由に設定することができる。以下の雫石方言の例では、(e. 1)、(f. 1)が2句の発話、(e. 2)、(f. 2)が1句の発話である。

(e) 鯨取った(「クジラ トッ「タ)

(e. 1) [ク]ジラトッ[タ

(e. 2) [クジラ]トッ[タ

(f) 鯨から食べる(「クジラカラ タ「ベル)

(f. 1) [ク]ジラカラタ[ベル

(f. 2) [クジラカラ]タ[ベル

④声調方言におけるイントネーション

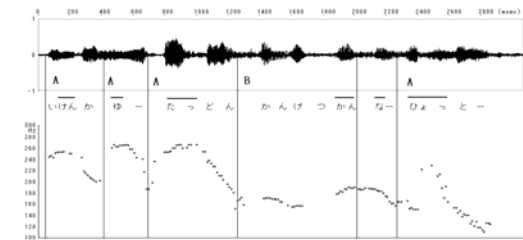
鹿児島方言のアクセントは、

A型 [○]○ ○[○]○ ○○[○]○…

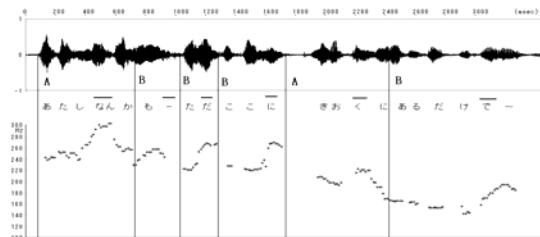
B型 ○[○ ○○[○ ○○○[○…

の2種類からなる2型アクセントである。上の音調特徴はアクセントの弁別特徴なので、消去することができない。従って、文節ごとにA型ないしB型の特徴が現れることにより、句頭、句末が表示される(g, h)。

(g) イケンカ ユータッドン カンゲツカンナー ヒョット(何とか言うのだけど思いつかないなあ、すぐには)



(h) アタシナンカ モー タダ ココニ キオクニアルダケデー(私などはもう、ただここに、記憶にあるだけで)



⑤声調と核の方言におけるイントネーション

京都方言では高起式(H)と低起式(L)の2種類の声調と下げ核によりアクセントの型が区別される。鹿児島方言のA型、B型と同じように、高起式と低起式の特徴はアクセントの弁別特徴なので、基本的には消すことができない。下の例では、それぞれ(1)が2句の発話、(2)が1句の発話である(上野 1989)。

(i) 魚もらう (HサカナHモラウ)

(i. 1) [サカナ(切れ目)モラウ

(i. 2) [サカナモラウ

(j) 魚食べる (HサカナLタベル)

(j. 1) [サカナ]タベ[ル

(j. 2) [サカナ]タベ%ル

(k) 野菜もらう (LヤサイHモラウ)

(k. 1) ヤサ[イモラウ

(k. 2) ヤサイ[モラウ

(l) 野菜食べる (LヤサイLタベル)

(l. 1) ヤサ[イ]タベ[ル

(l. 2) ヤサ[イ]タベ%ル

この方言では、高起式・低起式の声調が句頭を表すと同時に、句末を表している（「食べる」「野菜」のような低起式の語では、末尾の上昇の差により1句か2句かが示される。(j1)と(j2)、(k1)と(k2)参照）。

(3) 無アクセントのイントネーション記述 (福井方言の場合)

①方法

韻律上、最小の述部の単位を記述の出発点として、さまざまな文末詞がつく形式のイントネーションを考えていく。述部の韻律形式を整える作業が完成した後、述部に係る副詞成分、補語の成分を増やしていき、複雑な文の韻律の記述へと進む。文構造と韻律の関係を探る作業の前に、述部の韻律の記述を徹底させることから始めるボトムアップの方法が求められる。

②モダリティごとの韻律と“アクセント”

どんなモダリティが韻律に関わるか。行為要求、勧誘、意志や叙述、疑問などの「表現類型のモダリティ」（日本語記述文法研究会編 2003）は確実に述部の韻律に関わる。これらは無アクセント方言でも一種の型を持っている。無アクセント方言では、これらはイントネーションと記述されるが、有アクセント方言では、用言に付く付属語アクセントとして記述され、別の扱いを受けている。ここでは、無アクセントの福井方言で現れる単純な述部の固定的な文末音調は、イントネーションとは切り離して、意味と結びついた「意味内在アクセント」として処理することを提案した。

③行為要求文の韻律

例として「行為要求」のモダリティを扱う。福井方言には、「飲む」の単純な命令ノメに対して、禁止を表すノムナの他に、その行為の実行が行わないように命令するノマントケがある。「飲まないでおく」の否定形が由来である。発話時以降の聞き手の意識的な行為遂行を制限する「未実現の持続要請」であるが、自分の内省では「持続」そのものは意識されない。標準語では、実現しなかった結果状態の残存が必要であるが、福井方言の場合には必要ない。

行為要求文のタイプ

- | | |
|-----------|-----------------|
| (1)a.命令 | ノ[メ] |
| b.不実行命令 | ノマント[ケ] |
| c.禁止 | ノ[ム]ナ |
| (2)a.ネ形命令 | ノミ[[ネ、ノミ%ネ、ノミ[ネ |

- | | |
|-----------|--------------------------------|
| b.不実行ネ形命令 | ノマントキ[[ネ
ノマントキ%ネ
ノマントキ[ネ |
|-----------|--------------------------------|

- | | |
|---------|--------------------|
| (3)a.依頼 | ノン[デ、[ノンデ |
| b.不実行依頼 | ノマントイ[テ
[ノマントイテ |
| (4)a.促し | ノ[モ]] (cf. 勧誘はノ[モ) |
| b.不実行促し | ノマント[コ]] |

④行為要求文を韻律で分類する

行為要求の「単純文」は、末尾が下がる「下降系」と末尾が上がる「上昇系」の二つに分類できる。「上昇系」は聞き手の意志の配慮という意味的な共通点があると思われる。

上昇系 聞き手の意志を配慮する

下降系 聞き手の意志を配慮しない

上昇系では、上昇の位置や程度は様々なものに対して、下降は固定的である。これら是有アクセントのアクセント核を思わせる。

⑤行為要求文と文末詞

先の行為要求の単純文と文末詞の接続についてみる。(1) abc をまとめて (5) 命令形と呼ぶ。(2) 以下の場合も同様。

命令文に現れる文末詞との接続

- | | | |
|------------|----------|---|
| |] | マ |
| (5) 命令形-e | ノ[メ] | マ |
| | ノ[マントケ] | マ |
| | ノ[ムナ] | マ |
| (6) ネ形-ne | ノ[ミネ] | マ |
| | ノ[マントキネ] | マ |
| (7) 依頼形-te | [ノンデ] | マ |
| | ノ[マントイテ] | マ |
| (8) 促し形-o | | × |

- | | |
|------------|--------------------------------------|
| | [[ヤ |
| (5) 命令形-e | ノ[メ] [[ヤ
ノ[マントケ] [[ヤ
ノ[ムナ] [[ヤ |
| (6) ネ形-ne | ノ[ミネ] [[ヤ
ノ[マントキネ] [[ヤ |
| (7) 依頼形-te | [ノンデ] [[ヤ
ノ[マントイテ] [[ヤ |
| (8) 促し形-o | × |

文末詞の「下降系」と「上昇系」は話し手と聞き手の間の意志のギャップという観点から処理できると思われる（井上優 1995、2006）。特に下降系はここでもアクセント核を思わせる振る舞いをしている。

下降系 -]マ -]ヤ -]ノ
話し手と聞き手の意志にギャップがあることを表明し、聞き手に是正を求める。
上昇系 -[[ヤ -[[ノ
話し手と聞き手の意志にギャップが起こらないように、聞き手に求める。

⑥有アクセント方言の「意味内在アクセント」

従来、有アクセントにおいて「アクセント」と一括されていたものに対し、

- ・弁別的 (distinctive) アクセント：狭い意味の単語アクセント。音調型と意味との関係は恣意的 (例：[ア]メ「雨」とア[メ「飴」など)
- ・意味内在 (motivated) アクセント：単語が持つ意味とアクセントの関係が完全に恣意的でないもの。すなわち、意味と音調型の間になんらかの関係がみとめられるもの。

の二つを認めたらどうか。

取り立て詞：モ、サエ、ダケ、マデなど多くの方言で有核

命令・禁止形：多くの方言で有核 (京阪：置くな H2、H1 / 書くな L2、置け H1/書け L2)

「意味内在アクセント」は共時的に話し手が「強い意味」を感じ、それに音調型が合致した形で現れる。福井方言では、単純文、文末詞の「下降系」がそれに相当する。

有アクセントでは従来の「アクセント」と「イントネーション」の区別は、単語ごとに高さが定まっているかどうかであったが、この決め方でいくと、無アクセントの固定的なイントネーションの扱いが難しくなる。この点について、有アクセントのアクセントから「意味内在アクセント」を分離して、無アクセントではその「意味内在アクセント」の一部を共有していると解釈してはどうか。無アクセントでは意味内在アクセントとイントネーションははっきり区別できず、連続的と捉えられる。一方、有アクセントでも意味内在アクセントは弁別的アクセントとイントネーションの中間的なポジションに置かれる。アクセントもイントネーションも共にピッチの変動を利用している限り、こうした競合は起こりうると思われる。

参考文献

井上優(1995)「方言終助詞の意味分析—富山県砺波方言の「ヤ/マ」「チャ/ワ」—」
井上優(2006)「第4章モダリティ」『シリーズ方言学2方言の文法』岩波書店、137-139
今尾ゆき子(2003)「福井県鯖江市方言におけ

る命令表現の形式」『福井大学教育地域科学部紀要』第1部54、1-12

上野善道(1989)「日本語のアクセント」『講座日本語と日本語教育2』、明治書院

川上泰(1957)「準アクセントについて」『国語研究』7

郡史郎(2003)「イントネーション」『朝倉日本語講座3 音声・音韻』

日本語記述文法研究会編(2003)『現代日本語文法 4 モダリティ』くろしお出版

早田輝洋(1999)『音調のタイポロジー』大修館書店

前川喜久雄(1997)「アクセントとイントネーション—アクセントのない地域—」『諸方言のアクセントとイントネーション』三省堂

山口幸洋(1990)「ギラ(静岡県大井川上流方言)のアクセンテーション」『音声言語』IV

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計15件)

①Seiichi NAKAI, Linguistic Practice and the Centrality of the Cities: On Sustaining the “Traditional”

Landscapes and Linguistic Norms, NEOMAP INTERIM REPORT 2008 RESEARCH, 193-206 頁、2009年、査読無

②木部暢子、薩摩の漂流民ゴンザのアクセントについて—複合語のアクセント—、『日本語の探求—限りなきことばの智恵—』、北斗書房、333-340 頁、2008年、査読無

③木部暢子、方言イントネーションの記述について、『方言研究の前衛』、桂書房、443-459 頁、2008年、査読無

④新田哲夫、言語島について、金沢大学日中無形文化遺産プロジェクト報告書第2集、54-67 頁、2008年、査読無

⑤ダニエル・ロング、磯野英治、塚原佑紀、小笠原諸島の欧米系島民に見られる語アクセントの型およびその世代差、小笠原研究年報、31号、31-40 頁、2008年、査読無

⑥木部暢子、福岡市アクセントの平板化、国文学解釈と鑑賞、72巻7号、133-137 頁、2007年、査読無

⑦中井精一、地域研究と「方言文法全国地図」、日本語学、26巻11号、64-74 頁、2007年、査読無

⑧新田哲夫、日本諸方言に見られる形容詞語幹の長母音、金沢大学文学部論集言語・文学篇、27号、37-84 頁、2007年、査読無

⑨ダニエル・ロング、小笠原諸島に見る言語

接触の重層化、月刊言語、36 卷 9 号、大修館書店、24-31 頁、2007 年、査読無

- ⑩岸江信介・吉廣綾子、四国諸方言における入りわたり鼻音について－徳島方言を中心に－、『音声研究』、10 卷 1 号、49-59 頁、2006 年、査読有
- ⑪岸江信介、京阪式アクセントは東京式アクセントより本当に古いか、『日本のフールド言語学』、桂書房、94-107 頁、2006 年、査読無
- ⑫吉廣綾子・岸江信介・大山玄、出雲方言における中舌母音の音響的特性について、言語文化研究、14 卷、203-218 頁、2006 年、査読無
- ⑬中井精一、景観・感性・言語、『日本のフールド言語学』、桂書房、34-59 頁、2006 年、査読無
- ⑭新田哲夫、方言に見られる生き物名に付く接尾辞「メ」－石川県白峰方言を中心に－、『日本のフィールド言語学』、桂書房、122-143 頁、2006 年、査読無
- ⑮鳥谷善史、GIS を用いた既存地図データベースの試み、『日本のフールド言語学』、桂書房、189-205 頁、2006 年、査読無

〔学会発表〕(計 9 件)

- ①木部暢子・新田哲夫・岸江信介・中井精一・ダニエル・ロング・鳥谷善史、方言イントネーションの記述について、日本語学会 2008 年度秋季大会研究発表会、2008. 11. 3、岩手大学
- ②中井精一、都市の地域特性と敬語行動－北陸富山と伊賀上野に焦点をあてて－、変異理論研究会 131 回研究会、2008. 11. 2、岩手県公会堂
- ③鳥谷善史、GIS でことばの変化を描くために、－「早川谷グロットグラム」追跡調査報告－、日本方言研究会第 87 回研究発表会、2008. 11. 1、岩手大学
- ④木部暢子、方言アクセントの形成、西日本国語国文学会、2008. 9. 13、鹿児島大学
- ⑤ダニエル・ロング、マリアナ諸島の残留日本語の実態－拡散と収斂、社会言語科学会第 21 回大会、2008. 3. 23、東京女子大学
- ⑥岸江信介・中井精一・鳥谷善史、「日本語方言イントネーションのデータベース構築と音調記述、変異理論研究会、2007. 11. 7、沖縄国際大学
- ⑦新田哲夫、石川県白峰方言の複合動詞のアクセント、変異理論研究会、2007. 11. 17、沖縄国際大学
- ⑧ダニエル・ロング、標準語と地域言語に見られる言語景観、社会言語科学会第 20 回大

会、2007. 9. 15、東京女子大学

- ⑨鳥谷善史、ことばの変化を描くために－早川谷追跡調査から見えてきたこと－、変異理論研究会、2007. 5. 26、関西大学

〔図書〕(計 4 件)

- ①中井精一・東和明・ダニエル・ロング編著、南方新社、南大東の人と自然、2009 年、36-52 頁、74-87 頁
- ②小林隆・木部暢子・高橋顕志・安部清哉・熊谷康雄、岩波書店、シリーズ方言学 1『方言の形成』、2008 年、43-81 頁
- ③小西いずみ・三井はるみ・井上文子・岸江信介・大西拓一郎・半沢康、岩波書店、シリーズ方言学 4『方言学の技法』、2007 年、91-133 頁
- ④Long, Daniel, Duke University Press, *English on the Bonin (Ogasawara) Islands*, 2007 年、255 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木部 暢子 (KIBE NOBUKO)
鹿児島大学・法文学部・教授
研究者番号：30192016

(2) 研究分担者

岸江 信介 (KISHIE SHINSUKE)
徳島大学・総合科学部・教授
研究者番号：90271460

中井 精一 (NAKAI SEIICHI)
富山大学・人文学部・准教授
研究者番号：90303198

新田 哲夫 (NITTA TETSUO)
金沢大学・文学部・教授
研究者番号：90172725

ダニエル ロング (LONG DANIEL)
首都大学東京・オープンユニバーシティ・准教授
研究者番号：00247884

(3) 連携研究者

鳥谷 善史 (TORITANI YOSHIFUMI)
天理大学・文学部・非常勤講師
研究者番号：30412133